Ⅰ．平成９年度事業概要

1　全体概要

平成９年度に実施した発掘調査は、範囲確認調査を含め、１２事業・２７遺跡におよび、調査総面積は６２,２０６㎡である。地域的には一宮市、稲沢市、西春日井郡清洲町、岩倉市、名古屋市、瀬戸市、大府市、豊明市、豊田市の９市町にのぼった。

報告書の作成は、『ＮＡ３３５古窯跡群』をはじめとして『一色青海遺跡』『吉田城遺跡』『東新規道遺跡』『東苅安賀道遺跡』の５遺跡５冊（これらの印刷・製本は平成10年度におこなう）。報告書の印刷・製本は、『清洲城下町遺跡Ⅶ』をはじめとして『田所遺跡』『大毛池田遺跡』『西上免遺跡』『大縄遺跡』の５遺跡５冊。出土遺物の分析・整理は『高針原１号窯跡』をはじめとして『鴻ノ巣古窯跡』『細口下１号窯跡』『門間沼遺跡』『朝日遺跡』の５遺跡である。その他、『年報』（本書）を刊行した。

調査の地域的特徴を見てみると、前年度が尾張北部地域に集中していたのに比べ、今年度は豊田市域を中心として三河地域の比重が高まり、この方面が面積で約６割を占めるに至った。

調査課の体制は37名で、前年度に比べ２名の減である。管理課は８名であり、センター全体では45名の体制であった。

2　発掘調査

調査を実施した27遺跡のうち特に注目される遺跡としては、まず豊田市の川原遺跡がある。弥生時代後期に属する全国的にも屈指の大型墳丘墓と、あわせて墓前祭をおこなったのではないかと見られる遺構を検出した。瀬戸市の上品野遺跡では、約３万年前にさかのぼる台形石器が出土し、それまで縄文時代草創期から始まるとされていた瀬戸市域の歴史を大きく遡らせることとなった。

（１）旧石器時代～縄文時代

上品野遺跡から、約３万年前と考えられる後期旧石器時代の台形石器２点をはじめとする総計２００点を越す石器、剥片が検出された。製品だけでなく石核も出土しており、台形石器の制作過程を復元できる好資料となった。とりわけ、これまで愛知・岐阜・三重の東海地域は台形石器の分布の空白域であったことを考えれば、今回の発見は大変重要な意義を持つものといえよう。

権現山遺跡では、縄文時代後期から晩期の土器をはじめとする遺物および竪穴住居・土坑が検出された。竪穴住居には浅い掘り込み状の炉や貼床を持つものがあり、また、土坑に多量に廃棄されていた遺物は当該期の良好な資料となった。このほか、縄文時代の遺物は三ツ井遺跡や川原遺跡からも出土している。

（２）弥生時代～古墳時代

三ツ井遺跡では水田に関係すると考えられる溝の盛土中から遠賀川系の壺・甕が出土した。中期で注目されるのは志賀公園遺跡の竪穴住居である。円形の竪穴住居のうちの１棟は松菊里型住居に類似する形態を持つ。またほかに焼失家屋があり、柱穴には礎板や柱痕が遺存しており、当該期の上屋構造を知りうる良好な資料を提供している。

川原遺跡では、弥生時代中期に大規模な居住域であった地区が弥生時代後期から古墳時代には巨大な墳丘墓が築造されて墓域に移行することが明らかになった。墳丘墓は4基確認され、そのうちＳＺ2は、26m×35mという大きさであり、これは弥生時代後期の墳丘墓としては全国最大級である。また、これらに関連すると思われる方形周溝状遺構やＳＸ01、ＳＸ102～107などから出土した資料などは、墳丘墓へ葬られる人々への祭祀に関連するものと考えられ、新たな資料を提供したと言える。今後このような事例の増加によって墳丘墓と祭祀の関係が明らかにされるであろう。現在この墳丘墓に関わる当該期の集落は未確定であるが、集落から隔絶したこの墓域の存在は、矢作川中流域における政治社会の存在を予見させ、西三河地域の弥生時代の歴史を再考させるものとなった。

郷上遺跡では、Ａ区からＣ区にかけて幅5～10mの古墳時代の大溝が検出されたほか、削平されているため周溝の一部を検出するにとどまったが、方墳2基や、竪穴住居群などが検出された。

権現山遺跡では3基の古墳が確認された。中でも1基の円墳は横穴式石室をもっていたと思われ、石室に使用されたと思われる川原石が出土した。

（3）古代

川原遺跡では竪穴住居が12棟検出された。志賀公園遺跡Ｆ区では大溝を境にして7世紀後半代の遺構と8世紀以降の遺構群が南北にわかれて展開し、大溝は水路としての機能を持っていた可能性があることが判明した。上品野遺跡では、平安時代の方形の竪穴住居が竈の残った状態で検出された。ほかに土坑、溝などが検出され「吉」や「長」の墨書土器も出土した。

矢迫遺跡では、古墳時代中期の竪穴式住居が9棟検出された。谷を挟んですぐ北側に存在する神明遺跡とは同時期であるが、遺跡の性格に若干の違いがあるようであり、今後比較検討が必要となるであろう。

（4）中世から近世

大脇城跡では96年度に続いて調査がなされ、城館の主郭を区画する溝の配置が一層明確となった。このことにより主郭が一辺約40mの方形であることがわかってきた。また溝（堀）の中から出土した護摩札からは、天正四（1576）年に大御堂寺によって祈祷がなされたことが判明した。大御堂寺は知多半島の野間大坊であり、同寺との関係が浮かび上がり、武士の生活における貴重な資料となった。このことについては「埋蔵文化財愛知」で速報した。

志賀公園遺跡では、ＳＤ52・ＳＤ54が志賀城の北東端に相当する遺構であることが予測され、今後の綿密な検討を待つこととなった。同じように苅安賀遺跡でも苅安賀城の外郭と思われる東辺の河川と北辺の「伝外堀」が検出されている。ただ「伝外堀」の更に北にも大溝があることがこれまでの調査で判明しており、「伝外堀」が中堀である可能性も残されている。

郷上遺跡は戦国時代から近世を中心としており、全調査区に遺構が展開している。居住域は13世紀頃に形成されはじめ、以後、18世紀になって近くの台地上へと移り住むまで継続して営まれたことがわかってきた。Ｆ区の屋敷地の1つは一区画全体が検出された良好な資料となった。屋敷地群の東側には水田が営まれており、中・近世の集落景観を復元する上で貴重な資料といえる。

清洲城下町遺跡は継続して調査がなされてきた。昨年度すでに報告された石垣は、今年度取り上げをおこない、その後石垣下部の基礎構造をなす胴木を調査した後、これも取り上げた。また石は取り上げた後洗浄し調査を続けたところ、墨書をもつものがあることが判明した。その中の一つである『雑賀』の意味するところが特に今後の研究課題となった。また、石垣とともに五条川に面した区画は船着き場である可能性が考えられているが、今後の整理・検討により明確になってくるであろうと思われる。

3　調査報告書作成・調査研究活動

調査報告書の作成については、前年度から、原稿を作成した翌年度に印刷・刊行する工程に変更がなされた。これを受けて今年度は、平成８年度に原稿を作成した『清洲城下町遺跡Ⅶ』をはじめとする５冊の報告書を８月に印刷・刊行した。また今年度の調査報告書の原稿作成については、『ＮＡ335古窯跡群』をはじめとする以下の５遺跡についておこなった。

『ＮＡ335古窯跡群』は、「猿投山西南麓古窯跡群」に属し、そのうちの鳴海地区（Ｎ）の有松支群（Ａ）にあたる。検出した12世紀末のいわゆる山茶碗を生産する窯を中心として報告する。この報告は、前年度事業として原稿を作成済みの『円通寺古墓』との合本として刊行の予定である。

『吉田城遺跡』は、江戸時代の吉田城城下町関連遺構として推定される外堀を始め、屋敷地などを中心として報告する。

『東新規道遺跡』・『東苅安賀道遺跡』は、それぞれ古墳時代の遺構と中世の遺構を中心として報告する。

『一色青海遺跡』は、弥生時代中期における墓域と居住域を中心として、鎌倉・室町時代の時期の遺構についても報告する。

このほか、『年報　平成９年度』を３月に刊行した。これには調査研究員の積極的な取り組みにより、調査研究編として７本の論文を載せることができた。今後とも意欲的な取り組みにより質の高い論文の掲載を目指していきたい。

4　普及・啓発活動

発掘調査技術等研修会は県内市町村の埋蔵文化財担当者を対象とし、研修会（Ⅰ）・（Ⅱ）の２回、各２日ずつ実施した。研修会（Ⅰ）では、第１日目には「埋蔵文化財と現代社会」をはじめとする３つの講義と、「遺物整理の実際」のテーマでセンター内の見学を、第２日目には「埋蔵文化財調査の実際」の講義と埋蔵文化財展の見学を一宮市博物館に於いておこない、午後からは岩倉市内で発掘調査中の権現山遺跡において「脆弱遺物の保存処理」のテーマで、発泡ウレタンを使っての脆弱遺物取り上げの実習を行った。受講者は26名。

研修会（Ⅱ）では、『遺跡・遺物の保存』をテーマとしておこなった。第１日目は、奈良国立文化財研究所の加藤允彦氏による「遺跡の保存整備と活用」をはじめとする２つの講義のあと、犬山市からは青塚古墳の保存作業実施途中の現状、豊川市からは三河国分尼寺跡の調査と整備計画について、足助町からは城跡公園足助城について、以上の三市町村から、直面している問題や保存の計画などの事例発表があり、これをもとにシンポジウムをおこなった。第２日目には「清須城石垣保存への道」の講義と

「清洲城下町遺跡（清須城）の石垣について」のテーマで、これまでの調査結果について発表がなされた。つづいて、午後からは直面している清洲城下町遺跡発掘現場における、石垣の保存整備現場での見学会をおこなった。受講者は24名。

広報紙・誌の発行として、「愛知県埋蔵文化財情報13　平成８年度」を３月に、また「埋蔵文化財愛知」を年間で４回発行した。

現地説明会の実施状況は以下のようであった。まず豊明市の大脇城跡では昨年に続いての調査の結果として、大脇城主と伝えられる「梶川五左衛門」についての研究とあわせて遺構・遺物の説明をおこなった。230名の参加があった。

名古屋市北区の志賀公園遺跡では、飛鳥時代の掘立柱建物と竪穴住居、戦国時代の「志賀城」に関連するとみられる薬研掘状の溝を中心として説明をおこなった。真夏の炎天下ではあったが２９０名の参加があった。

豊田市の郷上遺跡では古代～中世の屋敷地の区画溝が検出され、明和４年（1767）の大雨によって、水難をさけるために現在の鴛鴨集落の高台の地へ移住するまでの集落の様子を中心として計画した。しかし、説明会の当日は折しも台風が接近し、基本的には説明会は中止のやむなきに至ったが、それでも風雨を突いて来訪された方もあった。

豊田市の川原遺跡は中世から縄文時代までの複合遺跡である。墳丘墓、方形周溝状遺構などを中心として計画したが、あいにくの大雨に見舞われ、やむなく中止した。それでも来訪された方も多く、資料を持ち帰っていただいた。

一宮市の苅安賀遺跡は、弥生時代から近世までの複合遺跡であるが、江戸時代を中心としておこなった。検出結果と江戸時代の「村絵図」との比較がなされ、当時の文献資料を補完することとなった。説明が始まる直前から雨が降り始めたが参加者は300名であった。

岩倉市の権現山遺跡は、近世から縄文時代後期までの複合遺跡であるが、円墳とその埋葬施設および弥生時代～古墳時代にかけての墳丘墓を中心としておこなった。説明が始まる前から雨が降り始めたが、参加者は200人であった。

稲沢市の下津北山遺跡では昨年に続いた調査の結果と併せて計画した。緑釉円塔が話題を呼び、４００名の参加があった。

このほか、県政記者クラブに対し、１件の記者発表および２件の資料配布をおこなった。記者発表は、一宮市八王子遺跡出土の銅鐸についておこなった。平成９年３月、倒立の状態で出土した銅鐸は、その出土状態から大きな話題を呼んだが、さらにその後の調査によって新たな事実が発見された。銅鐸の鈕の部分において、紐で結ばれてつり下げられ、それが長い間の使用の中で摩滅してついた縦方向の痕跡のあることがわかったのである。これは全国的にも初例であり、銅鐸の使用法の解明に向けて重要な資料を提供することとなった。なお、銅鐸は発表後当センターにおいて２週間にわたって公開したところ、230名の見学者があった。

資料配布の１件は瀬戸市の上品野遺跡出土の旧石器についておこなった。出土したのは台形石器が２点、掻器が２点、使用痕のある石片30点余、そのほか石器製作時に出る石屑200点余であった。瀬戸市域では従来縄文時代草創期まで確認されていたが、今回約３万年前までその歴史をさかのぼらせることとなった。石器は瀬戸市歴史民俗博物館で『速報』として展示していただいた。

資料配布の２件目は、清洲城下町遺跡の石垣に書かれた「墨書」についておこなった。墨書は10点の石に書かれていたが、そのうち３点について明瞭に『雑賀』の文字が読みとれた。文献資料に匹敵する貴重な成果であった。

埋蔵文化財展は、一宮市博物館が十周年を迎えるにあたり、同博物館および県教育委員会と共催で実施した。７月26日～８月31日 の期間、『埋蔵文化財速報展97』をテーマに開催した。展示内容としては、東海北陸自動車道関連の事業として当センターが近年調査をおこなった北道手遺跡をはじめとする遺跡出土資料、平成８年度の埋蔵文化財展開催以降に発見された重要資料、一宮博物館収蔵資料のうち元屋敷遺跡・馬見塚遺跡関連資料などであった。またこれらの他、トピックとして「マツリのカタチ」のテーマのもとに土偶・銅鐸・鳥形木製品・井泉周辺出土遺物・墨書土器・呪符木簡・緑釉円塔・墨書陶器などが、自然科学関連で地震痕の資料が展示された。

期間中の８月３日には、埋蔵文化財講演会が開催された。奈良大学の酒井龍一教授を招き、『銅鐸と弥生社会』というテーマで講演していただいた。折しも一宮市八王子遺跡出土の銅鐸が話題となっていたこともあって参加希望者が多く、抽選で100名の方に参加していただいた。

さらに期間中の２回にわたり、当センターによる遺跡調査結果の紹介をおこなう埋蔵文化財講座がおこなわれた。「八王子遺跡」をはじめとして６遺跡の紹介がおこなわれた。いずれの発表においても活発な質疑がおこなわれ、参加者の方々の熱意に驚かされた。２回ともに１００名の定員であったが、事前の申し込みはこれをはるかに上回ったために、抽選をおこなわざるを得なかった。歴史に興味関心をもたれる方は大変多い。今後はよりいっそう内容の充実を図っていきたい。

（鷲野　勉）